

## 四條畷市スマートシティ推進フォーラム第2部

日時：令和2年10月3日（土）14時00分～16時20分

場所：四條畷市立グリーンホール田原

---

### (3)大阪府の取り組み

- ・大阪スマートシティ戦略部が目指すこと

大阪府スマートシティ戦略部スマートシティ戦略総務課 課長 大河内 隆生

### (4) パネルディスカッション：「コロナ禍におけるスマートシティ」

登壇者： ・わたしのいえ・ほっこり 相良 佐知子、南佐 幸子

・関西電力株式会社営業本部地域開発グループ 副長 野々田 隆彦

・国立大学法人奈良先端科学技術大学院大学 情報科学領域

ユビキタスコンピューティングシステム研究室 特任准教授 諏訪 博彦

・四條畷市副市長 林 有理

(敬称略)

---

司会) それでは、第2部を始めたいと思います。

初めに大阪府のスマートシティに関する取り組みを大阪府スマートシティ戦略部スマートシティ戦略総務課 大河内課長様からご講演いただきます。よろしくお願いいたします。

大河内) 皆様、こんにちは、ただいまご紹介にあずかりました、大阪府スマートシティ戦略部スマートシティ戦略総務課の大河内です。

限られた時間でございますので、雑ばくなご説明になろうかと思いますが、よろしくお願いいたします。

わたくし、前職はスポーツ振興課長を拝命いたしておりました、ちょうど1年前は花園ラグビー場でラグビーワールドカップが行われておりましたので、そこで走り回っておりました。今年の4月にスマートシティ戦略総務課長を拝命いただき、毎日勉強させていただいているというような状況です。説明もなかなか、そういった人間がやっている状況ですので、わかりにくいこともあるかと思いますが、ご容赦願います。

目次といたしまして、5本立てを考えております。スマートシティ戦略部、スマートシティ戦略バージョン1、コロナ対策、ポストコロナ そして万博へ、として、最後に今やっている取り組みとして公民協同、大阪スマートシティパートナーズフォーラムというものがあります。

まず、大阪府はスマートシティを目指すということで、平成31年4月8日吉村知事就任会見で、高らかに宣言をされました。

同年7月に準備室ができて、現在大阪府のスマートシティ戦略の推進体制というのはご覧いただいている通りです。

部長は日本IBM執行役員から来ていただいております、民間の部長として、また公民協働ということを経営に掲げております、民間活力導入ということで、NTTさん、DoCoMoさん、ソフトバンクさん、NECさん、Panasonic Solutionさん、5人の民間交流員の方にご協力をいただいております。

また、市町村のほうからも、4つの団体、四條畷市さんのほうからも研修生という形でデジタル行政推進課というところに来ていただいております、活動いただいております。いわゆる行政職と情報系の職員が半々ずつという構成でございます、情報系職員に関しましては庁内各部署に点々と分かれてシステムに携わっているという状況です。

スマートシティ戦略バージョン1として、役所は常に戦略であったり計画であったりを作るのが好きのところですが、今、なぜ大阪はスマートシティをめざすのか、ということなんです。これは、大阪の抱える社会課題への対応ということと、課題を解決するプレイヤーの存在、世界の先進事例に学び、住民のQOL向上 グローバルな都市間競争に対応ということとして、人口減少をはじめとする様々な社会環境に効果的、効率的に対応すること、先端技術を住民の生活の中で生かしQOLの向上を実現することは住民の笑顔につながるということで、e大阪というものを狙いたいというように考えております。

3つの基本姿勢、ということで、戦略というものが机上の空論にならないように、「住民のQOLの向上」。住民が実感できる形で生活の向上をめざすというのをまず最初に掲げております。それと、やはりスマートシティの分野というのは民間との連携が不可欠ですので、公民連携・マッチングということで、公民連携、民間との協力が大前提ということになっております。

社会実装ということで、技術実験だけにとどまらず、いわゆる実用化に向けた取り組みということで、実装までを追及するということを、3つの基本事項として掲げているというところなんです。

これがプレイヤー、戦略に向けた取り組みのイメージ図です。四條畷市さまもこういった形の中で、指針や実装計画を策定されて、具体的な取り組みを勧められているということです。大阪府の課題ということで、いろんな例を挙げておりますが、大阪府に限らず府内の市町村で、大なり小なりこういった形で地域の課題としてあるのかなというように思います。それに対してどういった先端技術を活用できるのか、またそういった先端技術を活用するプレイヤー、実施主体はどこがいいのかと、いうことをイメージしている図です。

最終的に戦略室として何をめざすのかということをございます。当然ながら、2025

年の関西万博に向けた取り組みということで、大胆な規制緩和を伴う最先端の取り組みと、区域全体で住民に利便性を実感してもらう要因といたしまして、大阪モデルのスマートシティの基盤を確立して、先ほど申しましたe大阪、先端技術を活用することで住民が笑顔になる大阪を実現するための戦略を定めるということで、明確にイメージをしているところです。

これは先ほどのイメージ図を具体的に落とし込んだものですが、実際に住民のQOL向上の具体化に向けた取り組みは今まだスマートシティを支えるデータをみたくうえで、どういった形で整理をされるのかということろでして、ここに掲げる府内での横展開部分に関して、今後また大阪府と四條畷市といろいろ協力をしていきながら進めていきたい、と考えております。

言うまでもなく現状はコロナ禍ということでございますが、大阪府におきましては4月1日にスマートシティ戦略部が設置されまして、民間から来られました部長発案のもと、部内の横断型のチームを作り、コロナ対策をICTの側面でサポートしようということで、SWATチームと命名して取り組みを進めております。

いくつか具体的な例をお示しいたします。これは健康医療部からの依頼がございまして、実際に保健所等で患者さんに聞き取りを行った情報を、健康医療部の中できっちり情報共有できるようなシステムを、当部の職員が既存のシステムを活用して作ったというものでございます。

大阪コロナ追跡システム、この会場にも掲げていただいております、これにつきましてはいろいろな店舗やイベント会場に、事業者さんのほうでQRコードを掲げていただいで、それを来場者に読み取っていただきますと、その店舗や会場でコロナ陽性の方が出た場合に、ある程度の基準はございますが、登録していただいたアドレスのほうにお知らせするというシステムです。

「大阪おおきにアプリ」というものも作りました。先ほどの追跡システムの普及啓発に向けたひとつの取り組みということで、大阪コロナ追跡システムに協力をいただきますと、こういった形で画面が出てきます。これにつきましては、将来このコロナ禍を抜けた後の、いわゆるキャッシュレスであったりQRコードの活用といったことを見据えまして、こういったアプリを作っております。これも事業者さんのほうで、PayPayさんであったりとか、りそな銀行さんの協力の中で、アプリを開発しまして今実際に稼働しているという状況です。

大阪マイルということで、これは追跡システムに登録いたしますと、1ポイント、マイルポイントという形で貯まるシステムを作りました。10ポイントを1口としまして、民間企業さんから特典という形で、いわゆる商品的なものを提供いただき、抽選をして、インセンティブ的なものにしたいということでして、9月末でいったん締め切り、10月1日に抽選を行っています。初回は吉本興業さんにご協力いただきまして、なんばグランド花月の入場券が当たるといった形で、普及啓発をしております。

これは厚生労働部のほうから休業要請支援金ということで、できるだけ事務の効率化を図るという観点から、要請に基づいて当部の職員が既存の Kintone というシステムを使って作ったものです。休業要請外支援金であったりとかそれ以外のシステムの分に関しましてもこれを汎用化させる形で対応しているという状況です。

これも、いわゆる保健所業務の軽減といいますか、府民に対する利便性の向上ということで、問い合わせに対していわゆる AI チャットボットという形を導入いたしまして、できるだけ電話がつかないように、ボットを介した状態を作るということで導入しているものでございます。これについては補正予算という形で対応し、現在システムの構築中ということです。

ポストコロナ、ポスト万博へ、ということで、実際に我々は3月末に戦略のバージョン1というのを策定いたしましたが、すでにコロナということで、状況が目まぐるしく変わってきております。これは今我々が議論をしているところで、これで確定ということではございませんが、個人レベル—民間レベル—社会レベルということで、生活様式であったり経済活動であったり社会環境であったり、いろんな形で変わってきて、いわゆるニューノーマルといわれているものが出てきております。そういったものに対して、今後新しいテクノロジーとしてどういったものが活用できるのかという点も、戦略がいるのではないかなと考えております。これも、実際に今、我々としても新しい概念として都市免疫力の強化というものをとらえさせていただいております。

ここにさらに「ウイルスとの共存」を前提に「リモート」を取り入れて、「リモート・エコノミー」「チャレンジフィールド」ということで、免疫力のあるスマートシティ、迅速とか持続とかいうことですが、こういったものを取り組む必要があるのではなからうかなということでございます。実際に、これは「リモートでつながる便利な暮らしと安心な住まい、快適な仕事」いうように掲げておりますが、具体的な中で、リモートで見過ごしがちな便利な暮らしであったりとか、コロナ禍において各種みなさんの団体等、先ほどの報告にもありました通りいろんな取り組みをしていただいていると思っておりますが、今後さらにそういったものを進めていく必要があるということでございます。

最後に、公民協働ということで、大阪スマートシティパートナーズフォーラムというものを、9月25日に実施いたしました。府内の市町村さんにも、全市町村に賛助会員という形で参画いただいております。設立総会について東市長にもご出席賜りました、非常にありがとうございます。我々にとって、スマートシティパートナーズフォーラムというものは、大阪のスマートシティ化を目指していく上での、いわゆるプラットフォームということで、民間であったり学術であったり、市町村さんであったりとか、大阪みんなでスマートシティを目指そうという団体に今後育てていきたいと考えております。

ただ、すでにスマートシティの分野におきましては経済団体であったり学都であったり国であったりフォーラム的なものであったりというものがかなり出来上がってきております。我々としては、そういったところとの連携を図りながら、オール大阪で大阪をスマ

ートシティに導いて、進めていければと思っております。

こちら、さきほどの機能と被るところがあるのですが、イメージ図です。

こういった経済団体によるプラットフォームであったりとか、大阪産業局さん、企業さん、大学研究機関、市町村さんと連携を図っていきたいというものです。

最後に大阪スマートシティパートナーズフォーラムのスケジュールです。

今後、いろんなテーマごとにワークショップ、ワーキンググループを開催していきたいと思っております。実際に市町村さんのほうにいろいろな形で課題の抽出であったりとか課題の見える化であったりとか、そういったものを進めながら、それぞれの各府内市町村さんの抱える課題に対してどういったことができるのか、どのような形で民間とマッチングしていけるのかということは今後進めていきたいと思っております。

非常に時間の関係で雑ばくな説明になってしまいました。

スマートシティというとか小難しく聞こえると感じていますが、できるだけ府民、住民の皆様にも、便利さであったりとか手軽さであったりとか、そういったものを実感していただけるような、きめの細かい施策というものが我々に必要ではないかと考えております。

そういった中で、やはり基礎自治体である市町村さんとの連携、協力は不可欠であると我々は考えておまして、スマートシティ戦略部といたしましては四條畷市さんの取り組みは、特別、積極的な支援も含めて協力させていただければと思っております。また、住民の皆様にも、そういった中でご理解、ご協力をいただければと思っております。

本日はご清聴ありがとうございました。

司会) 大河内課長様、ありがとうございました。

大阪府の取り組みに合わせ、本市も頑張っていきたいと思っております。大阪・関西万博に向け関西圏が、盛りあがっていくことを楽しみにしております。

続きまして、パネルディスカッションを開催します。テーマは、「コロナ禍におけるスマートシティ」について行います。

最初に登壇者を紹介いたします。

第1部で「わたしのいえ・ほっこり」松本様からご紹介をいただきました、代表を務めておられます相良様。同じく代表の、南佐様。

関西電力株式会社で地域社会の課題解決と活性化に取り組んでおられます。野々田様。

奈良先端科学技術大学院大学 情報科学領域 ユビキタスコンピューティングシステム研究室 特任准教授でございます諏訪様。

最後に本パネルディスカッションでファシリテータを務めます、四條畷市 副市長の林です。

それでは、マイクをここで林副市長にお渡ししたいと思います。よろしく申し上げます。

林) パネルディスカッションを開催させていただきます。副市長の林です、よろしくお願

いたします。

冒頭の市長挨拶にもありましたが、今なぜコロナ禍におけるスマートシティというパネルディスカッションを行うのかというお話です。

先ほど大阪府の大河内課長からも非常にいいご指摘がありました。都市免疫力という観点で、私たちはもともと、コロナ禍が起きる以前に、スマートシティ化を地域の課題解決という観点においてめざすということでスタートいたしました。

しかしながら、その取り組みの途上でコロナ禍ということがおきまして、そのコロナという社会変容に合わせましてスマートシティ自体の方向性も、大きなボードは変わらないのですが、歩みが早まったり、少し方向性が変わってくるというようなことが起きてきたのかなということを考えております。

そのあたりを踏まえ、まず皆様に、地域の皆様、ご覧になっている皆様に、どのような変化が起きたのか、スマートシティがどのように応援できるのかといった観点で、ご登壇いただいている皆様からお話を頂戴できればということで、今回のパネルディスカッションを設営させていただいております。

全部で40分程度というお時間ですので、お一人お一人の発表は短くなるかもしれませんが。そちらにつきましては最後にご質問を受け付けるということにしておりますので、そちらでまたご質問をお寄せいただければというように思います。よろしく願いいたします。

それでは、改めまして登壇者の皆様に自己紹介と合わせまして、新型コロナウイルス感染拡大が起きる前と、拡大した後、緊急事態宣言等も出されましたけれども、どのような変化があったのか、まずは身近な活動におきまして、ご紹介をいただければと思います。

早速でございますけれど、相良さん、よろしく願いいたします。

相良) わたしのいえ・ほっこりの相良と申します。田原台二丁目に住んでおります。紹介を兼ねて、先ほど第1部で松本さんからあった、わたしのいえ・ほっこりのオンライン開催のお話と、野菜の共同購入の話をしりさせたいと思います。

第1部でもお話があった通り、私たちは0歳から90歳までの参加者で、松本さんのお宅を貸していただいて活動してきたのですが、コロナになりまして集まるのが難しくなり、「オンラインでつながっていこう」ということで、LINEを使ったライブ中継というものをさせていただきました。

まずは、お外に出られず遊ぶことができなくなった子供たちのために、絵本の読み聞かせをしてみたり、手遊びとかダンスをやって、聞き終わった後もお家でお父さん、お母さんと楽しんでいただけたらということで、そういう活動を中継させていただきました。その他、不安を抱えてらっしゃる大人たち、もうちょっと交流してみたい、会うことができなくなってみんな元気になっているかどうかを知りたいなということで、オンラインカフェというのを、LINEのテレビ電話機能を使ってさせていただきました。各々のお家で、

自分の好きな飲み物をタブレットの前に用意して、こんな事が不安だねとかこんなことをしているよという交流をさせていただきました。

あと、グリーンファームさんという農場がここの近くにあるのですが、もともと、私と南佐さんは、「多笑食堂」という、世間一般で子ども食堂と呼ばれている活動にすこしプラスして、子どもが中心なのですが、地域に参画したいと思っておられる方ならどなたでも参加できる食堂というものをこのグリーンホール田原を会場に開催させていただいていました。

こちらのほうにグリーンファームさんからお野菜をご提供いただいています、そんな縁がもともとあった中、学校給食センターのほうにも納品されてきたグリーンファームさんが、学校が休校になったことによって、もしかして困ってらっしゃるのではないかなと思ってお尋ねさせていただいたら、やはりお野菜が余って困っているということだったので、「わたしのいえ・ほっこり」の仲間を中心に、そこから実家のほうにも届けたいとか、お友達にも声をかけたいということで、共同購入というのをさせていただくことになりました。

これは学校が再開して、給食再開のめどが立つまでの期間ということで、させていただきました。

自己紹介を兼ねて、お話しさせていただきました。

林) ありがとうございます。

やはり従前と比べて、生活の変化はあったかと思います。

引き続きまして、南佐さん、自己紹介を兼ねてよろしく願いいたします。

南佐) こんにちは、「わたしのいえ・ほっこり」の代表をさせていただいております、南佐幸子と申します。よろしく願いいたします。

相良さんと、先にご登壇いただいた松本さんのほうから、「わたしのいえ・ほっこり」の活動についてはあらかじめだいたいご紹介させていただいたと思いますので、私からは、地域の一般市民として、コロナをきっかけにどのように生活が変わったかということをお話しさせていただきたいと思います。

コロナにより、IT化の推進がよりなされていると感じるのと同時に、ほっこりでも心のつながりというものを大事にしているのですが、リアルでつながっているということの大切さをより感じるようになりました。小さなことですが、私たちの生活にも、検温システムがスーパーに入る前にあったり、モバイルペイがより推進されたり、ウーバーイーツとか、そういった便利なツールが日常の身近な変化として感じられているなど感じるのですが、私も、これまではリアルでしか開催されていなかったようなオンラインの会議、ミーティング、勉強会などに、Zoomなどを通して、夜遅い時間帯でも参加することができるようになったので、子育て中のお母さんでも、仕事をされているような

方でも、日中忙しくて時間が取れないような方でも参加しやすいコンテンツが増えたなということを感じています。そのように多数の便利なツールを持っていることが、何かあった時の安心感につながるのではないかなと思っています。以上です。

林) ありがとうございます。まずお二人のほうから、地域密着でご活動をなさって生活をされているという方が、どのような変化があったのかというお話を頂きました。

リアルでつながっていたいという形が、先ほど松本さんからもおっしゃっておられましたように、ライブ中継などでつながっていく、オンラインでつながっていくというようなところは、コロナ禍において非常に大きかったのかなと思っています。

引き続きまして、野々田様のほうから、お仕事の中での変化、もしくは会社のほうで事業として行う上でのご見解、頂戴できればと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

野々田) 関西電力の野々田と申します。私は地域開発グループに所属しており、地域社会の課題解決と活性化に取り組んでおります。

コロナということで、我々も緊急事態宣言以降、テレワークが会社で原則となりまして、今まで毎日通っていたものが、家からパソコンをつなげて仕事をするようになりました。現在、緊急事態宣言が解除されて原則テレワークということではなくなったのですが、今でも会社ではテレワークを勧めるということと、もともとフレックスタイム制を引いておりましたので、これを活用する機会が増えまして、私は今、通勤時間をずらすということをやっております。

私は大阪南部に住んでいるんですけど、出勤時間を9時30分にすることで、電車が空いており、これはいわゆる三密を避けるということになりますので、活用させてもらっているところです。

また、テレワークにすることによって、Web会議もかなり増えまして、社内の会議だけでなくお客様ともWeb会議を活用することによって、無駄な移動を省けたり、話も短くできる、濃密な時間で会話できるようになったと思います。ただ、難点として、私は結構人と会うのが好きなのですが、電話では相手の表情が読めないということです。

相手の意向は確認はできるけれど顔が見えないので、このあたり、リアルのところとオンラインとのミックスというのが非常に大事かなと思っています。今回の会合がまさにそうなんですけれど、こうして会場に来ていただいている方とオンラインで見られている方で、どういった感じ方の違いが出てくるのかなと思っています。

一方、実時間のほうなのですが、テレワークになりますと通勤時間がなくなりますので、家にいる時間が多くなりました。平日、私、飲みに行ったとしても早く帰るようになり、平日に子どもと会う機会、会話する機会が増え、非常に良かったなと思っています。

休日に関しても、いままでは遠くに出かけたりしたのですが、家の近所で過ごすであったりとか、家族との時間が増えたということもあります。子供と一緒に家庭菜園を始

めたりとかいうこともありましたが、今後も続けていきたいと思っています。

一方で、家の周りですが、コロナ前、子どもが遊ぶ時には大人数で遊んでいたのですが、今、なかなか人が集まってくれないということで、2人、3人で遊ぶようになり、やはり防犯面が心配なところもあります。

幸い、四條畷市の場合は先ほど紹介がありました、OTTADE! というのがありまして、そちらで子どもの見守りができます。今回、OTTADE! の「見守りびと」というアプリがあるんですけど、皆さんの持っているスマホにアプリをインストールしていただきますと、今まで電柱などが基地局として登録されていたところ、スマホそのものが基地局になります。

皆さんに取り入れてもらうことによって、検知される数が増えてきますので、また、Android 版の OTTADE! 見守りびとアプリが新しくなりましたので、取り入れていただければな、と思います。四條畷市の広報にも出ておりますし、OTTADE! のホームページにも出ておりますので、ご協力をよろしくお願いいたします。

OTTADE! に関しては、2年前に四條畷市に取り入れていただきまして、いま、近隣の交野市、枚方市、10月からは豊中市でも導入していただけることになりました。ホイッスル型の端末を持って行っていただけますと、子どもの見守りができますので、四條畷市から出かけるときもぜひ活用していただけたらなと思います。OTTADE! に関しましては、さらなる検知精度を上げるために、今ついている基地局の場所の再配置を検討したり、現在は対象が小学生なんですけれども今後は高齢者にも活用できないかというところで、皆様とともに検討させていただければと思っています。

以上です。

林) ありがとうございます。

本市でも取り入れております OTTADE! についても取り上げていただき、ありがとうございます。子どもたちの居場所が分かるということで、密になって遊ぶことができない、もしくは外に出てこなくなった、というのは、おっしゃる通りかなと思います。そんな中で、OTTADE! 活用を新たな視点でしていきたいという思いを感じました。ありがとうございます。

続きまして、諏訪先生のほうから、大学での変化等を含めまして自己紹介をお願いいたします。

諏訪) はい、奈良先端科学大学院大学の諏訪です。自己紹介と、コロナによる変化ということで、始めさせていただきます。

まず、奈良先端科学大学院大学の紹介ですけど、ここから約 3 kmほど離れたところにあります、すごい身近なんですけれども、皆さま、なかなかご存じない方もいらっしゃるのではないかと思います。一番わかりやすい説明でいきますと、山中教授が京都大学に行

く前にいた大学です、という、みなさん、ああ、と言ってくれるんですけど、ほかの説明をすると、よくわかりません、といわれるのが大体かなと思います。名前の通り、世界最先端の研究をすることが使命になっている大学でありますけれど、地域にも開かれていまして、来月 15 日にもオープンキャンパスが予定されています。これは今のところ現地開催を予定しているんですけども、オンライン開催になるかもしれません。もし興味があれば、ぜひいらしてください。

そのなかで私が何をしているかといいますと、ユビキタスシステムコンピューティング研究室というところで、街の中からいろいろな情報を収集して、それをいわゆる AI を使って分析をして、サービスであるとかアプリケーションとして世の中に返していく、というような研究をしています。もう少し具体的に言いますと、スマートホーム、スマートライフ、そして今日のテーマであるスマートシティの研究をしています。スマートホームだと、家が皆様の行動を認識して、それに合わせたサービスをしてくれる、スマートライフであれば大阪府様のお話でも出てきましたけれど、QOL を推定してそれに対するアプリケーションを開発する。街、シティであれば参加型センシングで集めた情報を観光であるとか災害であるとかコロナの行動変容に使うというようなことをやります。

本題に入りますが、コロナで何が変わったか、というところですが、いろいろ変わりました。まず授業、いろいろ変わったんですけど変わらないところもあります。奈良先端大学では、もともと授業アーカイブシステムというものを使っていました。これが何かというと、日常の授業を常にビデオカメラで撮影していまして、学生が後から見られるというシステムを構築しておりました。なので、コロナになってほかの大学さんは皆さんどうしようと困っていたんですけども、我々は微動だにしなくてですね、そのまま見てもらえばいい。ただし、ちょっとだけ変わったところがありまして、教員は、学生が誰もいないところで、誰もいないところに向かって授業をすると、まるっきり反応がなくて、ウケを狙おうにも狙えない、笑いが入ってこないの、学生がわかっているのかいないのかわからない状態で授業をする、そこだけちょっと変わりました。学生は e ラーニングを活用するという形になりました。

ほかに変わったところ、ここは大きく変わったところなんですけれど、来月にもオープンキャンパスがあるんですが、5 月にも受験生向けに毎年オープンキャンパスをやっています。ですが、4 月に非常事態宣言が出て、オープンキャンパスを開催することができない、ほかの大学でも軒並み中止や延期になったんですけど、我々は「バーチャルでやりましょう」ということを決めまして、そこからバーチャルオープンキャンパス用のサイトを構築しました。何をやったかという、まず左下ですね、3D で大学を再現しました。これは単なる写真に見えますけれども、いまでもこれアクセスできますが、アクセスしていただくと、バーチャルな奈良先端大学を歩いてみて回れるようになっています。右下のほうは各研究室の紹介になっていまして、これもそれぞれクリックしていただくと、各研究室の紹介が見られると。さらに、Web 会議システムで各研究室の参加者さんをつな

ぎまして、受験を考えている受験生と学生が話したりですとか、我々教員が話したりというような状況を作ってますね、例年と変わらない参加者を確保して、このオープンキャンバスを乗り切るということをやりました。

3つ目なんですけれど、これは結構大変な話で、オンライン入試に変わりました。これ、来年の学生に来てもらうには、今年やらざるを得ないんですね、なんですけれど、対面でやるわけにはいかない、しかも厄介なことに、我々の入試って、全部面接だったんです。従来から面接入試を実施していたので、これはどうしようかと。従来の入試は、数学の入試だとホワイトボードに直接回答を書いてもらうといったことをやっていたので、これはどうしようかという話になったんですけれど、これもオンラインでやりましょうと。いろいろな問題はあるんですけど、受験生にはPCで参加してもらって、数学は紙に回答してもらってそれを映してもらう。ただし、替え玉やカンニングがあるかもしれないということで、試験開始前に部屋を全部確認して、誰も隠れていないか、カンニングペーパーがないかということを確認したうえで、オンライン入試をやっています。今のところ、特に問題なく来ています。ほかの大学さんでも苦労しているところだと思うのですが、替え玉対策とか機器トラブルへの対応というものはまだ完全に確立されているものではなくて、試行錯誤しながらやっている最中です。

ほかに何かあるかという、出張がなくなりました。去年まで、私は半年で20回ぐらい出張に行っていたんですけれども、今年に関しては今日が初めてです。

そして、国際会議、いわゆる学会発表ですね、海外に行って研究発表をするんですけれども、参加しやすくなった一方で、つらくなったというのもあります。参加しやすくなったというのは、もちろんオンライン会議なので、行かなくても済む、いつでも行ける、というのがあります。ですが、時差がありますので、夜中に開催されるんですね。そうすると、夜中に開催している学会に参加して、次の日の朝、普通に大学に勤務しますか、と、そういう話になってくる。24時間戦えますかというような中で仕事するというような感じですよ。

3つ目としては、研究ですね。いわゆる社会実験というか、学外での実験が禁止になって、できなくなりました。なおかつ、コロナに関する研究をしてくださいという要請が文科省とか社会からの要請としてありますので、我々はそれを考えるようになったというのがあります。

学生とのコミュニケーション、このあたり社会問題になっていますけれど、我々のところでは、在校生とのコミュニケーションは、もともと関係ができていますので、問題なくできています。つらいのは、新入生との関係です。オンラインミーティングって、目的のない会話が発生しづらいんですね。打ち合わせをしましょうと言って、研究テーマについては話せるんですけど、君どこから来たの？とか、趣味はなんなの？とかを聞くのは、なかなかやりづらい。その辺はちょっと辛かったですね。

あと、ようやく動き始めたところなんですけれど、今まだできてないのが、留学生の受け入

れと派遣ですね。3割くらい、うちの大学は留学生に来てもらっているんですけど、来ている人はいいんですが、これから来ようとしていた、入試で受かっていた学生がこれなくなった、これをどうしようということで、対応としては1年間入学を延期してもいいですよといった対応をしています。

そのような形でコロナに対応しています。以上です。

林) ありがとうございます。

皆さまから、生活がこのように変わったと、コロナウイルス感染拡大というなかで、否応なしに生活形態やつながりの形、企業の形、そして大学の形が変わってきたというお話を頂戴いたしました。

非常に、そこにIoT技術が注力視されているんだなということをリアルに改めて実感した次第です。そういうなかで、とはいいいながら私たちの生活習慣自体を、コロナウイルス感染症拡大というフェーズでどうやって対応をしていくのか、私などは3歳の娘がおりますけれども、手洗い・うがいを習慣化させる必死さみたいなものを、どのように教えるのかということ一つから、我々の生活自体が変わっていくのかなと考えております。

その他のことに関しまして、例えば先進技術等を使いまして、行動変容という言葉キーワードに事例の紹介をしていただければと思っておりますけれども、諏訪先生はそちらのご研究もされているとお聞きしていますけれども、よろしければ引き続きまして、そちらのご紹介をお願いしてもよろしいでしょうか。

諏訪) それでは引き続き事例紹介をさせていただきます。

行動変容を促す取り組みということで、われわれ、キーワードとしては行動変容、ナッジ、仕掛け学というテーマで研究をしております、これは何かと申しますと、人々が自発的に特定の行動を選択するよう促す仕掛けや手法になります。

ここでのポイントは、強制ではないということです。人が意識して「変えなきゃ」と思って無理やり変えるのではなく、自然な流れで変えてくれるということがポイントです。具体的にどんなことに我々は取り組んでいるかといいますと、先ほどデモで見ていただいた方もいらっしゃるかなとは思うのですが、今日外の会場に設置させていただいていますけれども、たとえば、COCOAというアプリ、皆さんご存じですかね。厚生労働省が出している接触確認アプリになります。それを多くの人インストールしてくれると嬉しいものですが、現状だとインストールするモチベーションがなかなか湧かないというところを、どうやったらおもしろくなるかというところで、一つ紹介すると、まず左側の図ですね、これが何かと申しますと、COCOAがインストールされているスマホだけに反応するおみくじです。これ、何も入っていないとできないので、周りの人が楽しそうにやっていると、じゃあ僕もやろうかなということで、じゃあ動かないからCOCOAをインストールしましょうというような形で促すと。じゃあ今度は右側になるんですけれ

ど、先ほど林副市長のほうからお話があったと思うんですが、手の消毒を促したい、けど子供はなかなかやりたがらないと。だとしたら、何か反応するものがあると子供は喜ぶので、こんなものを作りました。画面で、手を模したキャラクターがいるんですけども、目の前に行くとばい菌がついてるよーという画像が出ていて、消毒をするとサンキュー！と言ってくれる。これは何に反応しているかという、足踏みペダルを押したときの動きですね。これをIoTセンサーを使って認識をして、画面に反映させてあげると。こんなちょっとした工夫ですけど、ちょっと肘で押してくれるような動きで、行動を変えていくという取り組みをしています。

それ以外にも今、ゲーミフィケーションみたいなことを考えていまして、COCOAは接触といった状態しかわからないんですが、どこで人が混雑しているのかといったことが、大阪府さんの取り組み等で分かってくると、その混雑を避けるように交通手段を推薦したりですか、先ほど出ていたような、通勤時間を30分ずらしたらいいですよといった推薦ができるようになる、そのようなことをやっていきたい、そして、それが大阪府さんの言っていたような、都市免疫力の向上というものにつながっていくんだろうなというふうに考えています。以上です。

林) ありがとうございます。事前に先ほど諏訪先生から紹介していただいたシステムを見まして、非常に子育ての観点においていいなと思っていまして。

よくイオン等の施設にあります温度変化を感知するシステムというものは、赤色から自分の顔を入れると温度が平熱であると緑に変わるというのは、子どもは喜んでやります、その下にあるプッシュ式の消毒液というのは嫌がってなかなかやらないということがありまして、このようにばい菌がいて、それをシュッとするといなくなるんだよ、ということなんかをより楽しんで、ナッジという観点からしていただくということは、非常にこれからの社会の行動変容を促すという観点では大きいのかなと思っております。

実は行政におきましても、感染症の感染拡大に関する予防というのは、行政から、皆さん、集まらないように距離を保ってくださいと、放送で流したり広報誌に書いたりとか、直接的にお願いすることしか難しかったということがありますが、各所でこういうような仕掛けが出てくるのであれば、社会の感染に関する考え方みたいなものも随分変わってくるのかなと思いますし、我々が立案する政策にも、このようなナッジという観点を言いながらやっていきたいな、そう思いながらご発表を聞かせていただきました。ありがとうございます。

そういう風に変わりつつ社会という中で、新たな課題というのもやはり生まれてくるのかなと思っております。野々田様がそのなかで現在考えておられるそのような課題および課題解決の提案というものはなにかございましたら、ご紹介をお願いいたします。

野々田) 先ほど申しました通勤の、時差出勤等やっておりますので、電車がすいてきたとい

うのはあるのですけれども、やはりテレワークということで、公共交通機関に乗っている人というのは減ってきているということと、私自身も子供を連れて出かけるというときに、電車ではなくて自家用車で行ってしまおうとか、自転車を使うという形で、ちょっと公共交通機関を避けるというところがあるのですよね。他方で、地域の発展であったり地域の可能性という観点で考えますと、「公共機関の持続性」というのは非常に大事で、その辺のバランスを取らなければならないと思っております。

田原地域は坂道もありますし、地域にスーパーがないので地域に荷物を持ってくるとなると、バス停からご自宅までの移動は大変であるため、何とかできないかなというように考えております。先ほどの未来技術社会実装というところでもありましたけれど、ラストワンマイルの移動というところで、モビリティを使って何か地域の方のために応用できないかなということを、皆さんとともに検討していきたいと思っております。

また、ヒトの移動もそうですが、モノの移動も大事ですね。ヒトもモノも動かないと地域は活性化しないと思っております。

先ほどの話ですけれど、僕は飲み会の機会が減りましたので、帰りにスーパーによりまして、何かおいしいものを買って帰ろうとか、外食の機会が減って、買い物したりとか、ネットで物を買ったりとか、今まで気にしていなかったモノの移動ということが気になってきたなと感じています。

やっぱり、スーパーが近所がないということを考えると、どうやってモノを運ぶのかとか、ネットでの配送が、注文が増えてきますと、配送業者さん、地域のドライバーさんを含めて、荷物が増えてきた時にどうするのかという問題もたぶん増えてくると思います。モノの移動という観点は非常に大事だと思いますので、この分野に関しても、コンソーシアムの中で話をしたり、地域の方々のご意見を伺いながら、何かいい解決方法がないか検討してまいりますので、引き続きよろしくお願い申し上げます。

もう一つ言いますと、今、コロナということで、三密を避ける、密閉、密集、密接を避けることが大事だと言われているのですけれど、先ほどのテレワークなどになると、どうしても、ちょっと人と疎遠に感じるといいますか、距離が出てしまったというのがあるのですが、地域課題の解決については地域の方と密着して、いろいろ考えていくことが大事なのかなと思っております。

三密を避けつつも、地域と密着して、皆様とともに何かできたらなと思っておりますので、引き続きよろしく願いいたします。

林) ありがとうございます。第1部のほうで、田原支所長の笹田からも発表させていただきましたように、本市、特にこの田原地域におきましては、先ほどご指摘いただきましたように、交通の問題、医療の問題、買い物の問題というのが、住民の方々の切実な三大課題となっております。先ほどご発表頂きましたように、買い物自身も、たとえば農家から直接買うようになるとか、これまでの課題の在り方と、若干コロナ下での買い物のスタイル

が変わってきたのかなということだと思います。今後、本市におきましても、スマートシティという観点において、先ほど笹田支所長から発表させていただきましたように、国のお力もお借りしながら、大阪府のお力もお借りしながらでありますけれど、三大課題につきまして、当初想定していた形とはちょっと違う、コロナを踏まえたスマートシティの在り方というものを検討していきたいなと思っております。改めて課題提供を頂きまして、本当にありがとうございます。

諏訪先生のお話や野々田さんのお話をお聞きになって、地域で活動されてご生活もなさっているというお二人に、感想もしくはこういうことはどうだろうかという話を頂けましたらと思うのですが、いかがでしょうか。

相良) 失礼します、突然ですが、私の好きな言葉、地域でいろいろなことをしていくにあたって好きな言葉があって、「恩贈り」という言葉があるんです。恩返し、ではなくって、受けた恩を別の方に贈る、ということなんですけれど、私、今小学校2年生の子供がいるんですけれど、赤ちゃんの頃、孤独な育児をしております、自分でも気づいていなかったんですが、産後うつ状態になっていたみたいなんですけれど、そのときにそれに気づいて、声をかけてくださり、小さいお子さんとお母さんが集まっている場所とかを教えてください、声にかけてくださるような方がおられて、今、私も子供も元気に生活することができるようになってるんですけれど、その、私にいろいろ情報をくださった、声をかけてくださった方は、私の子供より大きいお子さんがいらっしゃったり、お孫さんがいらっしゃったりという方で、育児に関して私がお母さんに恩返しをするというのはなかなか難しいなと、であれば、今度は当時の私のように小さい赤ちゃんを抱えて困っているお母さんを見かけたときに、声をかけてあげることができれば、それがいいのじゃないかなと。私自身は特別な技術や知識があるわけじゃないのですけれど、そういうことで困っているのだったら、こういうジャンルがありますよとか、こういうお友達を紹介しましょうとかいうことができれば、非常にいい地域ができていくんじゃないかなと思っております。私だけでなく、皆さんがやっただされば、本当に住みやすくていい地域ができるんじゃないかなと。一人でいろんな情報や知識を持つことは無理なので、その部分を先ほど野々田さんや諏訪先生がおっしゃっていただいた技術で補強していただいて、こういう素敵なシステムがあるんだよとか、迷子で走って行っちゃってどこ行っちゃかわからない子どもさんがいるんだったら OTTADÉ とか登録したらどう？とか、ご紹介していけたらいいなと感じました。以上です。

林) ありがとうございます。南佐さん、どうですか。

南佐) そうですね、なんかちょっと、IT 化とかスマートシティって、わからないな、難しいな、私には関係ないな、とか思うこともあるのですけれど、便利になること、たくさん

楽しいこともあると思うので、自分事としてとらえて、興味を持って、楽しく対応していくことができたらなというふうに思います。そして、わからない、知らない方への対応も、情報の格差もあると思いますし、身体的、環境的に困難な方もいらっしゃると思いますので、そういった方への対応もしっかりしていただけたらなと思っています。あと、IT化で便利になった時に、置き去りにされないように心と体のケアも検討いただけたらなとおもっています。それから、より個人のニーズにきめ細かく対応したアプリがたくさん出てきて、生活もより便利になっていくのではないかなということを期待しています。以上です、ありがとうございます。

林) ありがとうございます。ちょうどここで開始してから40分です。最後お二人から、非常にいい視点を頂いたなと改めて思いました。

相良さんのほうからは、「恩贈り」という観点での地域活動を、新たな技術等を踏まえてどうのようにサポートしていくのか、特に一人ではいろんな技術やシステムを使っていくことはできないと、それを、地域やここにいる皆さんと一緒に使っていくというご指摘を頂きました。改めて私たちもそういうような観点に立っていきたいと思っております。

南佐さんのほうからも自分事として興味を持ってこういうものに楽しく付き合っていきたいというようなことを、実はこのフォーラムを通じて私たちが一番ご覧になっている方に伝えたいのはそこでございます、難しいなと思うことではなく、野々田さんからご提供いただきましたように、生活の課題を少しステップアップするために使うとか、諏訪先生から頂いております、ちょっとした行動を変化させるために技術を使っていくんだということの集合体を、この田原地域でのスマートシティでは、皆さんと共に興したいというように思っております。

決して大きな、どこかの企業さんの、ドーンというようなスマートシティを作っていくという話ではなく、身近なそういうもので市民の課題を解決する、変化を伴っていくということ、行政も一緒になってやっていくということを考えて、こちらはスマートシティをやっております。ぜひともそのようなことが、今回のパネルディスカッションを通じまして、お聞きいただいております皆様へ伝えることが、伝える一端ができればなというように思っております。

本当に4人の皆さま、ご登壇いただきましてありがとうございました。

冒頭に、ご質問を受け付けるというお話をさせていただいていたんですけど、ちょっと時間が押しているということで、事務局のほうから質問はなしということをお知らせしております。申し訳ございません、アンケートを皆様から頂戴することになっていると、画面でご覧になっている方は、Zoomのチャット機能のほうに、事務局からのお願いとしまして「アンケートにお答えください」というものが流れているかと思っております。ぜひとも何か、このフォーラム全てを通じまして、ご質問等ありましたらこのアンケートを通じて

何かお書きいただければと思います。後ほど、手法はわかりませんが、お答えをさせていただきますと考えております。

それでは、改めまして、非常に駆け足なディスカッションとはなりましたが、お忙しい中ご鼎談を頂きまして、4人の皆さま、本当にありがとうございました。

司会) ありがとうございました。パネラーの皆さんに今一度大きな拍手をお願いいたします。

それでは、本日のプログラムはこれで終了になります。

閉会にあたりまして、主催者を代表いたしまして、四條畷市長 東 修平よりご挨拶させていただきます。市長、よろしくをお願いいたします。

東) 本日は長時間にあたりご参加いただきまして、誠にありがとうございます。

発表していただいた方であったり、パネルディスカッションで発言していただいた方々につきましては、本当に素晴らしく、様々な観点をいただいたのですけれども、いかんせん、初めてのオンライン開催ですので、事務局側に、私も含めて、至らないことがあったということについては、大目に見ていただければ嬉しいなというように思います。

しかしながら、スマートシティというのは、「スマート」という言葉はどこか冷たい響きがあると思うのですけれど、まさかみんなでスクワットができる日が来るとは思わなかったもので、すごく楽しい時間を過ごすことができました。でも、これも、コロナが起これなくスマート化が進んでいなければ、別の場所の先生を映して一緒にやるなんてことは、おそらく起きなかったことだと思うんですね。その小さな一歩が重なると、おそらく1つひとつ、より一歩進んでいって、もっともっと便利なことが実現できると。

先ほど奇しくも南佐さんからご指摘いただいたとおり、なにかスマートシティという単語に距離感があるんですね、どうしても。私も最初ぱつと聞いたときにイメージできないですし、なにか無機質な印象がある。私はその印象をとにかく変えたいなというように思っています。

決してそういうものではなくて、密着であったり恩贈りであったり、様々なキーワードをいただきましたけれども、そういう1つひとつより良くなっていく、その先にスマートシティがあるので、なにかこう、このフォーラムを通じて、観点というか印象が少しでも変わったら嬉しいなと思います。

しかしながら、技術は技術で難しいところがありますので、職員一同、テクノロジーの部分をしっかり勉強していきながら、このテクノロジーだったら市民の皆さんもっと利便性が良くなるかなといったところをしっかりと学びながら、前に進んでいきたいと思っておりますので、引き続き何卒よろしくお願い申し上げまして、本当に簡単ではございますがフォーラム終了に際しましてのあいさつに代えさせていただきます。

本当にありがとうございました。

司会) これをもちまして、すべてのプログラムが終了となります。

本日は四條畷市第 2 回スマートシティフォーラム「新たな日常」におけるスマートシティにご参加いただきありがとうございました。また、初めてのオンライン開催のため、至らない点が多々ございましたことをお詫び申し上げます。

今後の参考にさせていただきますので、アンケートへのご協力をよろしくお願ひします。Zoom 機能のチャットに、ホームページアドレス、アンケートフォーム、載せさせていただきます。これから終了後しばらくの間載せておりますので、ぜひご協力お願ひ申し上げます。

会場でご参加の皆様はお忘れ物ないようお願いいたします。

本日は、ありがとうございました。